

子育て中の母親の心理とサポートのあり方について

成田 朋子

I	はじめに
II	子育て教室に参加した母親の子育て意識
III	子育て中の母親の心理
IV	母親の心理とサポートのあり方
V	おわりに

I はじめに

平成10年4月施行の児童福祉法において、保育サービスの範囲が一般の子育て家庭の子どもにも広がったことに象徴されるように、今日という時代は、子どもの発達にとってもっとも重要な役割を担う保護者を社会がサポートする時代になったといえるだろう。以前より指摘されてきたように、核家族化、少子化が進み、働く女性の増加により共働き家庭が一般化し、家庭や地域の子育て機能が低下したことによって、子どもや子育てをめぐる状況が変化し、元来私的な営みと考えられていた子育てにも社会の手を差し伸べる必要になってきたのである。ここ10年程の間には、さまざまな家庭施策、子育て支援策が講じられてきたが、それにもかかわらず、子育て中の親にとって子育てがますます難しいものと感じられていると言わざるをえない状況である。超多忙と見受けられる生活の中でも子どもに接することに楽しみ・喜びを見いだしている親も、一方にはそれほど多くはないにしても存在するが、多くの親は子育てに悩み、自信を失っているという現状があり、適切な社会の手を差し伸べる必要があるのである。

このように、多くの親に、子育てに対する自信を失わせ、子育てへの不安や悩みを増幅させる要因は何に帰せられるのであろうか。少子化、核家族化、共働き家庭の一般化、家庭や地域の子育て機能の低下などといった社会的背景は、もちろん複合的背景因子として重要であるが、もう少し個人の内面に立ち入った、子育て中の親の、特

に母親個々の意識レベルではどのように考えることができるであろうか。

カトローナら (Cutrona, C. et al., 1986)⁽¹⁾ は、3か月の乳児を持つ母親の抑鬱状態に影響を与える要因を分析している。彼らは、子どもの気質(扱いにくさ)、母親への社会的なサポート(他の人との親密な関係があること、他の人から手助けが得られやすいことなど)、出産前からの母親の気分の傾向などが、産後の抑鬱状態にどの程度影響をおよぼすかについて、分析し、相関係数を用いて表した。分析の結果(図1参照)からは、子どもの扱いにくさ、出産前からの母親の気分の傾向な

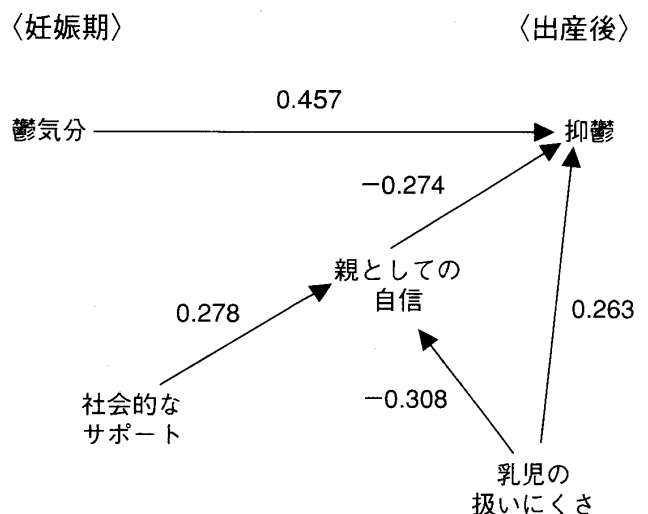


図1 母親の産後のうつ傾向に影響する三つの要因
 出産前からの母親の特性(抑うつ気分の強さ)、社会的なサポート、乳児の気質の特徴(扱いにくさ)の影響。矢印は影響関係の方向、数字は相関を表わしている。(Cutrona, C. et al., 1986)

どが母親を抑鬱状態へと導くことが示された。そして、社会的なサポートがあれば、母親は抑鬱状態に陥らずにすむことが示唆された。夫との関係やその他の人々との関係が影響するというのである。

子どもの扱いにくさ、出産前からの母親の気分の傾向などは、個人的要因に帰せられるが、ここで示唆された社会的サポートこそが、人間関係が希薄になった現代社会において求められているといえるのではないだろうか。

主たる養育者である母親（ほとんどの場合母親がその役割を担っていると思われる。従って、本稿では以降、母親を主たる養育者とみなして論じることとする。）が、常時、夫やその他まわりの人々、社会からの適切なサポートを受けることが可能な状態であれば、母親は過度の不安・自信喪失に陥ることなく、今日のような子育てがますます難しい状況にはならないのではないだろうか。

それでは、サポートを受ける側にいる母親にとってどのようなサポートであれば適切なサポートといえるのであろうか。子育て教室に参加した子育て中の母親が何を考え、どのように感じているのかに関しての生の声に耳を傾け、求められるサポートのあるべき姿について検討する手掛かりとしたい。

Ⅱ 子育て教室に参加した母親の子育て意識

「はじめに」で述べたように、さまざまな要因により子育てを難しく感じる母親の増加に鑑み、名古屋市K保健所では、0歳児を持つ母親を対象に「子育て教室」を開催している。教室の目的は、母子の孤立感を防ぎ、育児不安を軽減し、子どもの健全育成を図ることであり、概ね1～2週間に1度開催される。1回約2時間のスケジュールが組まれ、子育てについての講演・親子遊び等の実技指導を行い、さらに毎回座談会形式で育児の経験交流・情報交換が行われる。平成10年度においては、5月から7月にかけての5日間、9月から11月にかけての5日間、12月から2月にかけての5日間の3コースが設定され、筆者はいずれのコースにおいても1日ずつ講師として参加した。座談会のテーマは、子育て教室への参加目的・動機、子育てで困っていること・辛いこと、子ども誕生後

の生活で変わったこと、子育てで夫に望むこと、妻をどのように支えてほしいと思うか、夫は妻に何を望んでいると思うか、子育てをトンネルにたとえるとどのあたりか、子育てを一言でいうとどのように表現できるか、などであり、参加者の発言は担当保健婦により記録される。

ここでは、平成10年度子育て教室の発言記録により母親の子育て意識を探ることにしたい。

(1) 参加した母親の属性 (表1参照)

子育て教室に参加した母親は、1コース(5～7月)26名、2コース(9～11月)25名、3コース(12～2月)25名、計76名で、その年齢は21歳から39歳、平均年齢は29.0歳であった。

子どもの月齢は、平成10年度子育て教室が「生後3か月から1歳未満児と母親」を対象に募集した子育て教室であることから、3か月から11か月に互り、平均6.5か月であった。出生順位については第1子71名(93.4%)、第2子5名(6.6%)で、第1子が大部分を占めている。

表1 子育て教室参加者76名の属性

母親の年齢	21～39歳	平均 29.0歳
子どもの月齢	3～11か月	平均 6.5か月
出生順位	第1子 71名 (93.4%) 第2子 5名 (6.6%)	
出産時期	結婚後1年目 25 (32.9%) 2年目 13 (17.1%) 3年目 6 (7.9%) 4年目以上 9 (11.8%) 不明 23 (30.3%)	
就労経験	あり 54 (71.1%) なし 0 (0%) 不明 22 (28.9%)	

出産時期は、結婚後1年目から11年目に分布し、1年目は25名(32.9%)である。「不明」も23名(30.2%)と多い。「不明」が多いことに関しては、母親の年齢および子どもの月齢以外は座談会で回答を得ることになっていて、その回に欠席すると、それ以後質問する機会はなく「不明」となり、その結果「不明」が多くなるのである。因に5回すべてに出席できた親子は76名中32名(42.1%)である。なお、出席していても、当該の質問

に答えなかった場合は、反応「NA」と分類した。

「就労経験あり」は54名(71.1%)で、そのうち11名(14.5%)は育児休暇中である。「なし」は0名、「不明」は22名であった。

(2) 参加目的・動機 (表2参照)

以下の質問項目については複数回答の結果である。また、(1)で述べたように「不明」回答がかなりの割合を占め、また回によりばらつきもあるため、割合はその回に出席し質問に答えた人数に対する割合とした。

参加目的・動機を答えた母親は、出席回答した69名のうち65名あり、参加目的・動機として一番多くあげられているのは「友達づくり」34件(49.3%)である。それに次いで「同年齢の子どもとの遊び・交流」15件(21.7%)、「他の人の子育ての様子を知りたい、話を聞きたい、刺激を受けたい」7件(10.1%)、「いろいろ体験したい」、「母親の気分転換」、「外出する機会」それぞれ4件(5.8%)ずつ、「その他」5件(7.2%)、出席したが本質問に回答しなかった「NA」の母親4名(5.8%)であった。

表2 子育て教室参加目的・動機

—出席回答者69名・複数回答
(割合は回答者69名に対する割合)

友達づくり	34名 (49.3%)
同年齢の子どもとの遊び・交流	15 (21.7)
他の人の子育ての様子を知りたい・話を聞きたい	7 (10.1)
いろいろ体験したい	4 (5.8)
外出する機会が欲しい	4 (5.8)
母親の気分転換	4 (5.8)
その他	5 (7.2)
N A	4 (5.8)

(3) 子育てで困っていること (表3参照)

何らかの困っている事柄をあげた母親は60名(出席回答した母親の90.9%)、「特になし」は5名(7.6%)、「NA」1名(1.5%)であった。具体的に回答された困っている事柄としては「発育・発達」13件(19.7%)、「離乳食」12件(18.2%)、「夜泣き」9件(13.6%)、「夜間の授乳」、「生活リズムが確立できない」、「人みしり」がそれぞれ5件(7.6%)

ずつ、「ミルク嫌い」、「自分の時間が持てない」が4件(6.1%)ずつ、「断乳」、「夫の非協力的態度」、「後追い」が3件(4.5%)ずつ、「寝つきが悪い」、「家族間の育児方針が異なる」、「歯が生えてきて授乳時痛む」が2件(3.0%)ずつであった。

表3 子育てで困っていること

—出席回答者66名・複数回答
(割合は回答者66名に対する割合)

あり	60名 (90.9%)
発育・発達	13 (19.7)
離乳食	12 (18.2)
夜泣き	9 (13.6)
夜間の授乳	5 (7.6)
生活リズムが確立できない	5 (7.6)
人みしり	5 (7.6)
ミルク嫌い	4 (6.1)
自分の時間が持てない	4 (6.1)
後追い	3 (4.5)
断乳	3 (4.5)
夫の非協力的態度	3 (4.5)
家族間の育児方針が異なる	2 (3.0)
寝付きが悪い	2 (3.0)
歯が生えてきて授乳時に痛む	2 (3.0)
なし	5 (7.6)
N A	1 (1.5)

(4) 子どもが生まれてからの生活の変化

(表4参照)

子どもが生まれてからの生活の変化について座談した回に出席した母親は61名で、「変化あり」と回答した母親は60名(98.4%)、それに対して、「変化なし」と回答した母親は1名(1.6%)のみであり、子どもの誕生が親にとって大きな出来事であることを示す数値といえよう。

変化としては、「子ども中心になった」20件(32.8%)、「自由時間の減少」11件(18.0%)、「夫の好ましい変化—帰宅が早くなった、手伝ってくれるようになった、など—」21件(34.4%)、「夫の好ましくない変化—協力が得られず母子家庭のようなど—」6件(9.8%)、「妻(あるいは夫と妻)の好ましい変化—けんかしなくなったなど—」6件(9.8%)、「妻(あるいは夫と妻)の好ましくない変化—けんかが増えた、お化粧しなくなった、など—」9件(14.8%)であった。

表4 子どもが生まれてからの生活の変化

—出席回答者61名・複数回答
(割合は回答者61名に対する割合)

変化あり	60名 (98.4%)
子ども中心になった 自由時間の減少	20 (32.8) 11 (18.0)
夫の好ましい変化 夫の好ましくない変化	21 (34.4) 6 (9.8)
妻の好ましい変化 妻の好ましくない変化	6 (9.8) 9 (14.8)
その他	3 (4.9)
変化なし	1 (1.6)

(5) 子育てで夫に望むこと (表5参照)

子育てで夫に望むことについて座談した回に出席した母親は54名で、その中で、夫に望むことを具体的に述べた母親は46名(85.2%)、「なし」との回答が7名(13.0%)、「NA」が1名(1.9%)いた。望むことの内容については、「育児協力—あやしてほしいなど—」28件(51.9%)、「家事協力—夕食をつくってほしいなど—」3件(5.6%)、「その他」6件(11.1%)に分類できるが、「期待しない」が7名(13.0%)、「何もしてくれない方が良い」が3件(5.6%)あったことは注目すべきであろう。

表5 子育てで夫に望むこと

—出席回答者54名・複数回答
(割合は回答者54名に対する割合)

あり	46名 (85.2%)
育児協力 家事協力 その他	28 (51.9) 3 (5.6) 6 (11.1)
期待しない 何もしてくれない方が良い	7 (13.0) 3 (5.6)
なし	7 (13.0)
N A	1 (1.9)

(6) 夫に支えてほしいこと (表6参照)

回答者54名のうち夫に支えてほしいことを具体的にあげた母親は40名(80.0%)あり、「なし」が4名(7.4%)、「NA」が10名(18.5%)であった。支えてほしい内容は「精神的支援—気持ちわかってほしいなど—」22件(40.7%)、「物理的支援—お風呂に入れてほしいなど—」14件(25.9%)、「その他」4件(7.4%)という内訳となった。

精神的支援—気持ちわかってほしいなど—」22件(40.7%)、「物理的支援—お風呂に入れてほしいなど—」14件(25.9%)、「その他」4件(7.4%)という内訳となった。

表6 夫に支えてほしいこと

—出席回答者54名・複数回答
(割合は回答者54名に対する割合)

あり	40名 (80.0%)
精神的支援 物理的支援 その他	22 (40.7) 14 (25.9) 4 (7.4)
なし	4 (7.4)
N A	10 (18.5)

(7) 夫は妻に何を望んでいると思うか

(表7参照)

夫は妻に何を望んでいると思うかについては、出席者54名中44名(81.5%)が何らかの望んでいると思う事柄を述べ、4名(7.4%)が「わからない」、3名(5.6%)が「ない」と述べ、「NA」は3名(5.6%)であった。望んでいると思う事柄を分類すると、「夫への関わり・配慮—かまってもらうこと、二人で外出すること、など—」19件(35.2%)、「安定した精神状態—八つ当たりしないことなど—」10件(18.5%)、「役割実施—家事をしっかりなど—」9件(16.7%)、「その他」6件(11.1%)に分類できる。

表7 夫は妻に何を望んでいるか

—出席回答者54名・複数回答
(割合は回答者54名に対する割合)

望んでいると思う	44名 (81.5%)
夫への関わり・配慮 安定した精神状態 役割実施 その他	19 (35.2) 10 (18.5) 9 (16.7) 6 (11.1)
わからない	4 (7.4)
なし	3 (5.6)
N A	3 (5.6)

(8) 子育てをトンネルに例えると今の場所はどこ
の辺りだと思うか (表8参照)

図2のようなA4版用紙を渡し、電車の位置を描いてもらった結果、出席者全員がいずれかの位置に描いた。入り口付近に描いた母親46名(85.2%)、中程6名(11.1%)、出口付近2名(3.7%)であった。入り口付近に描いた理由としては「始

まったばかりで先が長い」、「今後いろいろなことがありそう」が多くあげられていた。中程に描いた理由は「子どもの反応が出てきて少しずつ手がかからなくなってきた」、「断乳ができて一歩前進した感じ」など、出口付近に描いた理由は「1歳過ぎた。私は子どものペースに合わせてついて行く」であった。なお、本子育て教室に参加した子どものうち第2子は5名いたが、そのうち2名はこの回に欠席のため「不明」、2名の母親が入り口付近に描き、1名の母親が出口付近に描いており、第2子をもつ母親が出口付近に描き易いという傾向は認められなかった。

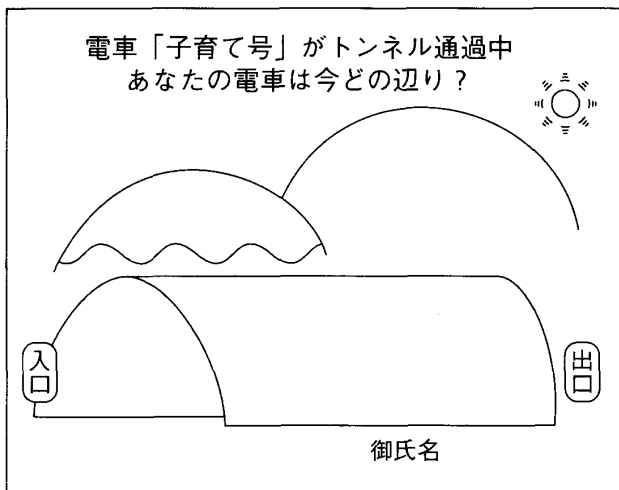


図2 回答図版

表8 子育てをトンネルに例えると今の場所はこの辺りか

—出席回答者54名・複数回答
(割合は回答者54名に対する割合)

入	口	46名 (85.2%)
中	程	6 (11.1)
出	口	2 (3.7)

(9) 子育てを一言で表現すると(表9参照)

図2用紙の裏に子育てを一言で書いてもらう。出席者全員54名が書いたことばを分類すると、「自分の成長に関するもの—自分の成長、大人も共に成長、自分を見つめふりかえる、など—」20件(37.0%)、「喜び・愛情を表現したもの—喜び、楽しみ、愛情、幸せなひととき、笑顔、など—」14件(25.9%)、「体力・忍耐にふれたもの—年中無休の体力仕事、忍耐と努力、など—」9件(16.7

%)、「手探り・未知を意味するもの—暗中模索、未知との遭遇、など—」4件(7.4%)、「その他」7件(13.0%)であった。

表9 子育てを一言でいうと

—出席回答者54名
(割合は回答者54名に対する割合)

自分自身の成長に関するもの	20件 (37.0%)
喜び・愛情を表現したもの	14 (25.9)
体力・忍耐にふれたもの	9 (16.7)
手探り・未知を意味するもの	4 (7.4)
その他	7 (13.0)

Ⅲ 子育て中の母親の心理

子育て教室に参加した母親の座談会の発言記録は以上のように整理できるが、これら発言内容を手掛かりに、平均的な子育て中の母親の心理を描いてみよう。

本子育て教室に参加した母親達のほとんどが、初めての子どもの子育て中であり、「子育てで困っていること」について多岐に互る回答がみられたことからわかるように、子育て中の母親達は日々さまざまなことで戸惑いながらも、子育て教室その他の場へ出掛け、母親同士情報交換することにより、ほとんど無意識のうちに、精神の安定を保っていると考えられる。

ほとんどの母親は出産前までは仕事を持っており、子どものいない頃の生活は、「仕事で忙しかった」、「旅行やアウトドアが中心だった」、「外出が多かった」、「遊んでいた」などのことばで多く語られている。そのような生活から、まさに子ども中心の生活に変化したのである。

子ども中心になって変化したことを問うた結果は、夫も妻も、「帰宅時間が早くなった」、「時間の使い方が巧くなった」など好ましい方向への変化と、「夫が出産前より子どものようになった」、「ストレス・不満を感じる」など好ましくない方向への変化があるが、妻からみた夫は大いに好ましい方向へ変化しているようである。それに対して妻の方はやや好ましくない方向へ変化していると妻自身認識しているようである。

妻からみて、夫が大いに好ましい方向へ変化していると認識し、そのように回答しているとはい

え、次の質問「子育てで夫に望むこと」に対しては、「土日曜日は夫一人で子どもを外に連れて行ってほしい」といったような具体的な要望が多数あがってきている。「夕食を作してほしい」のような家事に対する協力要望は極わずかであるのに対して、「育児全般ができるようになって」のような育児に対する要望が強いのである。「望むことなし」と同程度に「期待しない」という回答があること、そして「何もしてくれない方がよい」という回答があることは、考えさせられる現象である。

「子育て中の私をどんなふうに支えてほしいか」に対しては、「家事をしている間子どもをあやしてほしい」といった具体的な回答もあるが、半数以上は、「精神的に支えてほしい」、「ねぎらいのことばがほしい」などといった精神的支援を望む声である。

次に、「夫は妻に何を望んでいると思うか」を考えてもらうと、イライラしたりハラハラしている自分自身を思い浮かべてであろうか、「ゆったりしたやさしい気持ちで」といったような回答も目立つが、それ以上に「もっと夫にかまってほしい」と思っていると思う」と回答した数の多さが目立つ。妻が子どもの世話で忙しく、夫へのかかわりが少なくなったことへの不満である。子どもが誕生して以後は、夫は夫と父親の2役を、妻は妻と母親といった2役を担っていかなければならないのであるが、2役への切り替えも難しく、また、親の役割を身につけるには時間も要するという事であろうか。

トンネルの中に各自の子育て号を描いてもらった結果は、大部分が入口付近であった。医学が進歩してハイリスクな時期を過ぎつつあるといっても、子育ては始まったばかりとの認識が高いことがわかる。

子育てをどのように認識しているかを一言で表現すると、「愛情・喜び」、「体力」にふれた記述ももちろんかなりの数みられるが、それ以上に「自分自身の成長」に関する一言が述べられている。大変なこともいろいろあるが、子育てを通して子どもとともに成長する面があると、子育てを肯定的に受け止めていると考えられよう。

Ⅳ 母親の心理とサポートのあり方

以上のように、子育て中の母親の心理を整理す

ることができたが、カトローナらの示唆した社会的サポートが的確に作動するためには、どのような条件整備が必要であるのかについて考えたい。

(1) 母親の願望

手掛かりとして、「子育てで夫に望むこと」、「どのように支えてほしいか」についての回答から考えてみよう。

「子育てで夫に望むこと」に対しては、家事に対する協力要望は、「家事をしてほしい」2件、「夕食をつくってほしい」1件と、極わずかであるのに対して、育児に対する要望が強いことがわかる。「育児全般ができるようになってほしい」、「お風呂に入れてほしい」、「土、日曜日は夫一人で子どもを外に連れて行ってほしい」、「休日は夜の育児を担当してほしい」、「もっと遊んでやって」、「たまにあやしてほしい」等などの具体的な要望が多数あがってきている。さらに、「5分でよいから子どもと真剣につきあってほしい」、「夫はお風呂、寝かせなど、いわゆるおいしいところのみしかやらない。おむつ替えなどもっと大変なこともしてほしい」、「子どもが何かしても知らせるのみで、すべて私(母親)まかせ」などの回答からは、主に世話をしている母親の立場からみて、もう少し子どもとかわってほしいとの切実な願いが込められているのではないだろうか。

このように大方の母親は、子育てをする上で夫にこまごまとした要望を出しているのであるが、約2割強の母親は「なし」と答えている。「なし」の回答すべてが、母親が満足できる位父親が協力的で、何も望むことがないという回答であればよいのであるが。

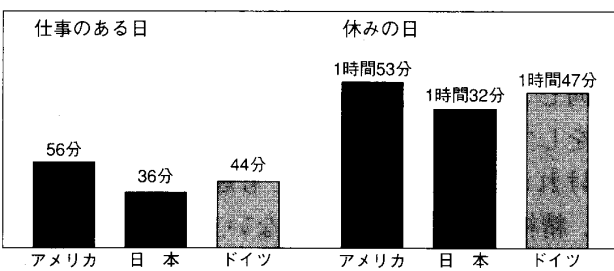
そして「期待しない」、「何もしてくれない方がよい」と回答した母親が約2割弱もいるのである。「仕事が忙しいので望めない」はともかくとして、「まず自分のことをきちんとしてほしい」や「かえって仕事が増えるから何もしてくれない方がよい」、「育児の手伝いは望まないから、私の仕事を増やさないで」という回答さえもみられる。多くの親にとって、子育ては父親・母親として初めての経験であり、育てる過程の中で、それぞれの役割行動を身につけていかなければならないと思われるが、これらのケースの母親は、父親が父

親としての育児行動を学習することを、早々に諦めてしまっているのであろうか。

また、「子どもが泣くので望めない」という回答は、望めない状況が一時的なものであれば問題ないが、ずっと続いているとすれば、誕生後これまでの父子の触れ合いがどのようなものであったのかと危惧せざるをえない。かつて存在し、未だ根強く存在するといわれる、「父親は仕事、母親は家事育児」という性別役割分担の考えから抜け切れず、「父親は仕事、母親は家事育児」という役割分担を遂行して来た結果であろうか。

この性別役割分担の考え方に関しては、日本の女性の生活や意識は、この2, 30年間で、世界全体の傾向と共通の方向へと大きく変化してきているにもかかわらず、性別役割分業観は、先進国の中で日本だけ特異に変化していないと指摘されているところである(2)。

社会が変化し、「母親は家事・育児」の時代から、「母親は仕事も家庭も」という時代になり、父親も育児参画すべきだと言われてきたはずであるにもかかわらず、一般に、日本の父親は、子どもと触れ合う時間が少ない、子どもにかかわる度合いが低いと指摘されている(図3、表10参照)(3)。



注：ドイツは旧西ドイツ

図3 父子の接触時間

(総務庁青少年対策本部, 1986より)

表10 父母の子どもに対する関与度パターンの国際比較

国別	関与度パターン (%)			
	父母積極型	母親積極型	父親積極型	父母消極型
日本	10.7	58.5	6.1	24.8
アメリカ	50.1	33.9	9.2	6.8
西ドイツ	31.0	55.5	5.1	8.4

(総務庁青少年対策本部, 1987より)

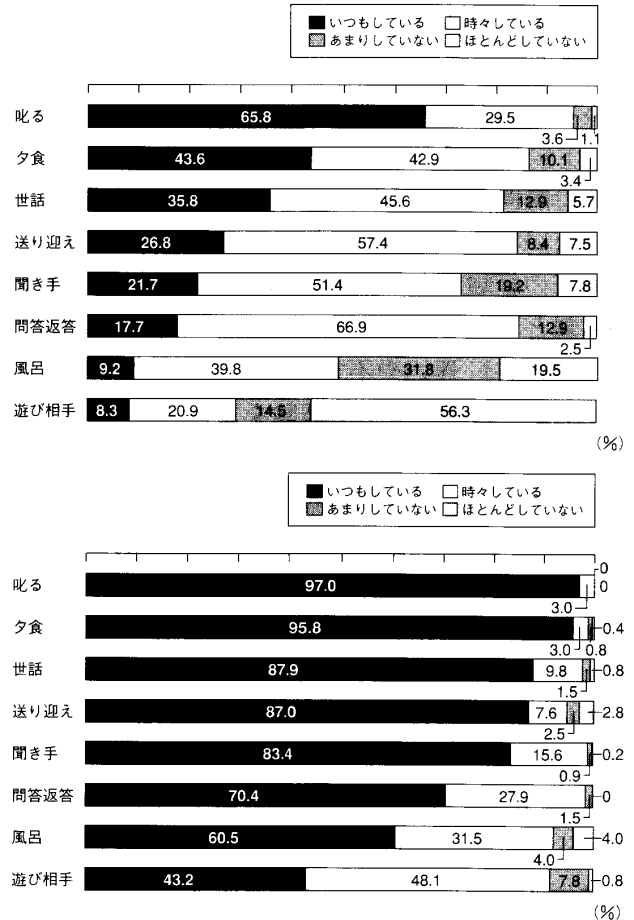


図4 父親・母親の育児行動

(牧野・中野・柏木, 1996より)

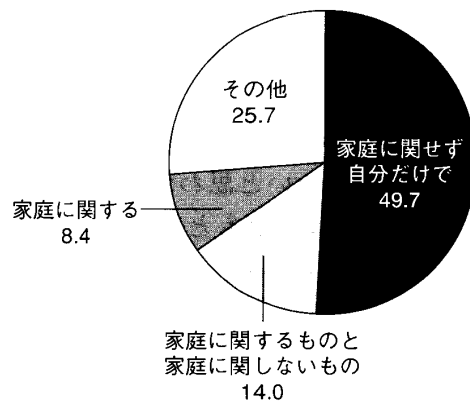


図5 まったく自由な1日があったらどう過ごすか—父親の回答

(牧野, 1987より)

また、現時点での父親と母親の育児行動の差も歴然としている(図4参照)(4)。そして、「まったく自由な1日があったらどう過ごすか」に対して、約半数の父親が「家族に関せず、自分だけで」と回答したという資料(図5参照)(5)を前にすると、日本人の、中でも多くの父親の意識変革が必要なのではと考えさせられてしまう。

もちろん最初から完全な父親である必要はないし、また不可能であろう。日本では子どもが生まれると夫婦お互いの呼び方で「お父さん」「お母さん」に変化すると言われてきたが、子どもが生まれた瞬間、即座に親としての行動がとれるわけではないだろう。父親にとっても母親にとっても初めての経験であり、迷いながら、不安を抱きながら親としての行動を身につけていけば良いのである。最初は、迷いや不安はあって当然である。迷い、不安を抱き、様々な経験を重ねることによって、親としての自信も生まれてくるはずである。

ところで、地域の育児機能が低下したといわれる現在、一番頼りになるのは、一体誰であろうか。筆者が関与した、幼児を対象にした調査⁽⁶⁾では、子育ての知識の情報源としては「友人・知人・近所の人」「新聞・雑誌・テレビ・育児書」「祖父母」があげられているが、子育ての悩みの相談相手には、まず第一に「夫または妻」があげられ、次に「友人・知人・近所の人」「祖父母」があげられていた。妻が頼りにし、子どものことについて一番相談する人物は夫なのである。したがって、子育てはいつも母親一人だけでやらなければならないのではなく、父親・母親が協力して、自分たちの家族を形成していくのだという姿勢・気構えで協力態勢をとることが必要であると思われる。

協力態勢をとるためには、夫は仕事が忙しいからと諦めずに、何とか育児に参画してもらえないようにしなければならないと思われるが、上述のように、そもそも父親は子どもとふれあう時間が少ない。「いわゆるおいしいところのみしかやらない」との回答にみられるような、比較的扱いやすい場面でふれあうことにより、子どもはかわいい、子育ては楽しい営みだと思ってしまう可能性が高いと思われる。母親の感じているような、子育ての悩ましさ、煩わしさをあまり感じることもなく、子どもに対する分身感が母親よりも強く、育児による制約感が母親よりも低いのである(表11参照)⁽⁷⁾。つまり、母親が子育てで悩んでいることを理解しにくいと考えられる。

このような夫に対して、「子育てで夫に望むこと」を話し合った回の発言の中に、「ほめてやってもらうようにしている」ということばがみられたが、一つの生活の知恵として、母親側も努力の余地

表11 育児への感情の父母比較

	父 親	母 親
第Ⅰ因子:育児への肯定感	2.91(0.60)	2.98(0.55)
第Ⅱ因子:育児による制約感	1.88(0.46)	< 2.24(0.51)***
第Ⅲ因子:(子どもは分身)感	2.58(0.85)	> 2.41(0.78)**

注: ** $P < .01$, *** $P < .001$.

(柏木・若松, 1994より)

があるということではないだろうか。基本的には何もしない父親であったにもかかわらず、夫に粘り強く育児への協力を求め、夫が少しでも手伝ってくれた時にはそれを強化するという、過剰でない、ネガティブでないアプローチで、育児参画へと導いた例は、他の調査⁽⁸⁾にも紹介されている。

(2) 父親からのサポート

それでは、父親は子育てに、具体的にどのように参画すればよいのであろうか。

「こんなふうに支えてほしい」への回答からは、「家事をしている間子どもをあやしてほしい」、「家事をしてほしい」、「お風呂に入れてほしい」などの物理的支援よりも、「私の気持ちをわかってほしい」、「ありがたい言葉、ねぎらいのことばがほしい」、「私と話をする時間を作って話を聞いてほしい」などの言葉にあらわれているような、精神的支援が望まれていることがわかった。

ところで、物理的支援においても、たとえ母親と同じような育児行動をとる位、かなりの育児参加をしていても、母親が期待する水準に達していなければ評価されないことも起こり得る。まして、精神的支援は目に見えない支援である。受け止める側の認識の程度により全く異なった受け止め方をされることもあり、父親にとっては大変困難な課題であるといえよう。しかしながら、「言ったら支えてくれるようになった」という回答に示唆されるように、比較的単純な人間関係しか経験する機会がなく、相手の内面にまで思いを致らせる必要もなく生活してきたため、お互い気がつかないことも多いようである。期待しても無駄だからと諦めるのではなく、お互いの内面を思いやった上で協力、支援を求めることも大切である。お互いが自己主張のみをするのではなく、お互いがお互いのことを十分認めて、尊重して、協力態勢を構築できれば、子育てもスムーズに循環していく

ということではないだろうか。

以上のように、子育てをする上では切実な願いを吐露する母親達であるが、子育てを一言で表現するという課題に対しては、「自分の成長に関する表現」、「喜び・愛情を表現したもの」が目立った。子育ては自分自身の成長でもあり、大切な仕事だと認識しているということであろう。

最近の発達心理学では、これまでの親子関係の研究は、発達の主体として子どもだけを取り上げており、親はすでに「完成した」存在として子どもの発達に影響を及ぼす「環境因」としての扱いしかしてこなかったことが指摘されている⁽⁹⁾。親は、そのような完成した存在ではなく、子どもに一方的に影響を及ぼすばかりでなく、子どもという存在から影響を受けて変化成長するものでもあるというのである。どのように変化するかについては、柔軟さ、自己抑制、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生き甲斐・存在感、自己の強さという6領域が抽出されている(表12参照)⁽¹⁰⁾。育児行動を通して、迷い、悩みながら、人格的に6つの側面で成長するということである。

今日は、家族のあり方が大きく変わり、かつて

のような、親のモデル、特に父親のモデルは存在しない時代である。模索しながら築いていくことが今日の父親・母親に求められているといえるだろう。子育ての日々の場面一つ一つにおいて、迷いながら、模索しながら、様々な経験をすることによって、夫婦として成長・発達し、また、親として成長・発達することが望めるのではないだろうか。そして、このようにして親になっていくことが子どもにとっても望ましいのではないだろうか。

(3) 社会的サポート

以上、一番身近な夫からのサポートをみてきたのであるが、次に社会からのサポートについてふれておこう。

II-(7)で述べたように、「夫は妻に何を望んでいると思うか」の問いかけに対する回答には、「もっと夫にかまってほしいと思っていると思う」、「イライラ、ハラハラ、八つ当たりしないしてほしいと思っていると思う」が多くみられた。前者の回答に対しては、父親も母親も子育ての中で親になっていくこと、協力態勢で子育てを乗り切

表12 「親としての成長」6領域の項目例

因子名	代表的な項目
柔軟さ	角がとれて丸くなった 考え方が柔軟になった 他人に対して寛大になった など
自己抑制	他人の迷惑にならないように心がけるようになった 自分のほしいものなどが我慢できるようになった 他人の立場や気持ちをくみとるようになった など
運命・信仰・伝統の受容	物事を運命だと受け入れるようになった 運や巡り合わせを考えるようになった 常識やしきたりを考えるようになった など
視野の広がり	日本や世界の将来について関心が増した 環境問題(大気汚染・食品公害など)に関心が増した 児童福祉や教育問題に関心をもつようになった など
生き甲斐・存在感	生きている張りが増した 長生きしなければと思うようになった 自分がなくてはならない存在だと思うようになった など
自己の強さ	多少他の人と摩擦があっても自分の主義は通すようになった 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった 物事に積極的になった など

(柏木・若松, 1994より)

ることが大切であることに気づき、解決しなければならぬと思われる。後者の回答からは、母親自身、イライラしたり、ハラハラしている日頃の自分自身を思い浮かべて回答したのであろう、母親自身完璧な母親だとは思っているわけではないことがわかる。

ところで、この間に回答するためには、ほんの何分かの間でも夫のこと、自分自身のことをふりかえったはずである。子どもに振り回されている日々の生活の中で、夫のこと・自分自身のことを振り返る時間はおそらくないと思われるが、子育て教室という場面で、問いかけられ、改めて、日頃の自分達自身をみつめることができたのではないだろうか。これらの問いかけをすることは、内省し、次のステップを踏み出すことに寄与したのではないだろうか。子育て教室を運営するにあたって、座談の時間を設定することの意義を認めることができよう。

次に、子育て教室への参加目的・動機への回答を今一度みてみよう。参加目的・動機として、49.3%と最も多くあげられたのは「友達づくり」であった。母親達は子どもの友達づくりも期待して参加するが、まだ0歳児であることを考えれば、子ども同士のふれあいはそれほど期待できないはずである。同年齢の子ども達のいる空間で時を過ごしたいという気持ちで参加するのであろうが、母親の多くは、わが子と同年齢の子ども達のいる空間と時間を共有することによって、母親自身の友達を求めて参加するのではないだろうか。

他の調査⁽¹¹⁾でも、母親達に子どものための教室に参加する動機を問うと、その上位に「友達づくり」があげられており、この「友達づくり」は子どもの友達づくりだけでなく、むしろそれ以上に母親自身の友達づくりが目的になっていることが示唆されている。

出産前まで仕事をしてきた多くの母親達は、出産前までは、様々な人間関係の中で生活していたと考えられるが、出産後は、まだ話のできない子どもとの隔離されたような生活が続くことになる。本子育て教室のような場に参加し、多くの親とコミュニケーションすることによって、隔離された生活から派生する、取り残されたという感覚が軽減され、またわが子のほんの些細な様子から

発達に漠とした不安を抱いていても、他の母親達も同様の不安を抱いていることを知り安心できるのである。

自分のまわりにいる子育て中の母親達は皆、自分と同じ不安や悩みを抱えているのだということがわかるだけでも、母親の閉塞感・孤立感は軽減するものと思われる。そして、漠然とした不安感を軽減することにより、余裕をもって育児にあたることができ、さらには、夫にも余裕をもって接し、協力態勢もとり易くなるという循環が生じると考えられる。

このように、同じような気持ちをもった母親同士お互いがふれ合い、支え合うことによって、本子育て教室という存在が社会的サポート機能を果たすことになるといえよう。

(4) 社会的サポートのあり方

以上みてきたような、平均的な、子育て中の母親達は、子育てに意義を見いだしてはいるが、日々様々なことで悩み、不安になり、夫の暖かいサポートを求めていることがわかった。そして、子育て教室に参加することが、母親の不安軽減に役立つことも示唆された。

それでは、このような次世代を育成する親をサポートするためには、どのような社会的サポートが望ましいのであろうか。

様々な制度を作って支援するというハード面の支援はもちろん大切であることは言うまでもないが、ただハード面を補強するに止らず、本論で考察したような父親・母親の内面を考慮に入れた、父親・母親がお互いの信頼関係を基礎に、親として成長できるような子育て支援が必要であると思う。そしてその中で、子どもの真に健やかな発達にとって何が大切であるのかを、個々の親が自分自身の問題として考えられるようなサポートであることが必須であると思われる。

V おわりに

子どもの発達にとってもっとも重要な役割を担う保護者を社会がサポートする時代になったにもかかわらず、子育て中の親にとって、子育てがますます難しいものと感じられているのが現状である。

サポートを受ける側にいる母親にとってどのよ

うなサポートが求められているのか、またどのようなサポートが適切であるのかを考える手掛かりを得るために、子育て教室に参加した母親の発言を分析し、考察した。

さまざまな制度を作ってハード面から支援するに止まらず、母親の内面を考慮に入れた、父親・母親が親としても成長できるような子育て支援が必要であることを示唆した。

【注】

- (1) Cutrona, C. & Troutman, B.R., 1986 Social support, infant temperament, and parenting self-efficacy: A mediational model of postpartum depression. *Child Development* 57, 1507-1518
- (2) 山本真理子 (編著) 1997 現代の若い母親たち 夫・子ども・生活・仕事 ミネルヴァ書房
- (3) 総務庁青少年対策本部 1986 子供と父親に関する国際比較調査
総務庁青少年対策本部 1987 日本の父親と子供：アメリカ・西ドイツとの比較 子供と父親に関する国際比較調査報告書
- (4) 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 (編) 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房
- (5) 牧野カツコ 1987 働く父親の家庭生活と意識 家庭教育研究所紀要 8, 42-51
- (6) 三重県乳幼児教育センター調査協力員 1996 子育て上の悩みと相談に関する調査研究報告書—平成6年度「子どもの生活実態と子育ての現状に関する調査」に基づいて— 三重県乳幼児教育センター
- (7) 柏木恵子・若松素子 1994 「親になる」ことによる人格発達：障害発達の観点から親を研究する試み 発達心理学研究 5, 1, 72-83
- (8) 氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房
- (9) 大野祥子 1998 父親であること 子どもの養育者としての役割 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学 家族の発達・個人の発達 ミネルヴァ書房 149-184
- (10) 前掲署 (7)
- (11) 拙稿 1995 早期教育と子どもの発達—ベブスイミングスクール生および修了生へのアンケートから— 高田短期大学紀要 13号 1-13

【参考文献】

- ・ 柏木恵子 (編) 1998 結婚・家族の心理学 家族の発達・個人の発達 ミネルヴァ書房
- ・ 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 (編) 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房
- ・ 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる (編著) 1998 母親の育児ストレスと保育サポート 子育て支援・環境づくりへの指標 川島書店
- ・ 氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房